

新井皓士(あらい・ひろし)

一九四一年生まれ。いざれ回想録、しかし爺ムサイしな、と躊躇するうち、定年後の比較的自由な二年間が流れ去り、昨年四月から放送大学に引張り出され東京多摩学習センター所長として、夏休みもほとんどない毎日となつてしまった。特任教授というから暢気なものと勘違いしたのが身の定め、ま、大きな車はゆっくり回る、と嘯っている昨今です。

土岐健治(とき・けんじ)

一九四五年、名古屋市に生まれる。東京神学大学卒業。東京大学大学院西洋古典学専門課程博士課程修了。東京大学、東京女子大学などの非常勤講師を経て、現在一橋大学大学院言語社会研究科教授。主要著書は『新約聖書ギリシア語初歩』『イエス時代の言語状況』『新約聖書ギリシア語構文法』はじめての死海写本』『初期ユダヤ教の実像』『初期ユダヤ教研究』など。

白井敬尚(しらい・よしひさ)

一九六一年生まれ、グラフィック・デザイナー。白井敬尚形成事務所代表。タイポグラフィを中心としたデザイン・ワークに従事。主な仕事：

朗文堂『タイポグラフィの領域』『書物と活字』『欧文書体百花事典』大日本印刷『秀英体研究』『EXHIBITIONS』青土社『ユリイカ』『日蝕狩り』誠文堂新光社『アイテア』など。

山本貴光(やまもと・たかみつ)

一九七一年生まれ。ゲーム制作に従事の後、文筆業。百学連環(西周)という言葉が気になつて、ソクラテス以前の思索からプログラム言語までのあいだをうろろしています。作物に、共著『心脳問題』(朝日出版社)、共訳『サールMIND』(朝日出版社)ゲーム『That's GT』『戦国無双』(コーエー)、ウェブ「哲学の劇場」など。

高木晴(たかぎ・はる)

一九七五年生まれ。一名 Hal Seibitz もしくは高文清。GHH(人文学歴史総合研究所)研究助手(休職中)。同研究所機関ウェブページ『PsylenEndeliecgfhuNingenc』監修担当『連載』(Criminal Vocaies)。

松永正義(まつなが・まさよし)

一九四九年生まれ。六八年から七八年まで東京

大学、同大学院の中国文学科で学ぶかたわら、戴國輝氏のもとで台湾研究に入る。その後成蹊中学・高等学校の漢文教員を経て、八六年から一橋大学の中国語教員、九六年から言語社会研究科所屬。著書『台湾文学のおもしろさ』(研文出版)、共編著『台湾百科』(大修館)、共訳書『彩鳳の夢』『終戦の賠償』(研文出版)など。

古澤ゆう子(ふるさわ・ゆうこ)

一九四九年生まれ。国際基督教大学教養学部人文科学科卒業。ドイツ・ヴェルツブルク大学博士課程修了。ギリシア古典・ドイツ文学専攻。一橋大学言語社会研究科教授。著書『Eros und Seelenruhe in den Thaisyen Theokrits (Königshausen/Neumann)』『牧歌的エロース——近代古代の自然と神々』(木魂社)、『ムーサよ、語れ——古代ギリシア文学への招待』(三陸書房)。

鵜飼哲(うかい・さとし)

一九五五年生まれ。研究分野はフランス語による文学・思想、ポスト植民地文化論など。著書に『償いのアルケオロジー』(一九九七)、『抵抗への招待』(一九九七)、『応答する力』(二〇

○三) など、翻訳書にジャン・ジュネ『恋する虜』(共訳、一九九四)、『アルベルト・ジャコメッティのアトリエ』(一九九九)、ジャック・デリダ『首者の記憶』(一九九八)、『友愛のポリティックス』(共訳、二〇〇三) など。

藤野寛(ふじの・ひろし)

一九五六年生まれ。アドルノなどと関わっていると、社会学だの文学だの音楽だの、何の専門知識もないことについても書かねばならなくなり、たいへん居心地が悪い。が、ある時、「狭く深く」はどのみち無理なのだから、「狭く深く」よりは「広く浅く」でいこうと、悟りを開いた。それ以来、素人っぽいものしか書いていない。

尾方一郎(おがた・いちろう)

一九六一年、親の勤務地の松江生まれ。寝屋川西宮を経て埼玉県越谷に育つ。東京大学人文科学研究所独語独文学専攻修士修了後、同助手を経て一九九三年から一橋大学に勤務。専門は近代ドイツ文学と思想。一番の趣味は本を読むこと。但し時刻表が好きな位なので雑誌。あと鉄道に関しては旅行のついでに写真を撮る程度。

武村知子(たけむら・ともこ)

一九六三年生まれ。二〇〇七年度『言語社会』

特集責任担当編集委員。著書『どろろ草紙縁起絵巻』(フィルムアート社)、『日蝕狩り——ブリクサ・パーゲルト飛廻双六』(青土社)。翻訳に、A・タルコフスキー『タルコフスキー日記II』(キネマ旬報社)、J・チヒョルト『&記号の変遷』(誠文堂新光社『アイデア』別冊)等。

### 特集後記

少々まとまりのない特集になったようでもあ  
る。何が「無双」なのだからよくわからない。し  
かし何事も一回性のミッションという意味では  
無双にできないし、人文学が扱うのもっぱら  
一回性の「できごと」であったりするのである。  
様々なものが指の間からこぼれる焦慮、茫然自  
失。あるいは意表を突かれる随喜。バランスを  
失っては、立て直す。収めたい限りのものを一  
度で収めきろうなどと考えるのはよくない。収  
めきれないものがこんなにも無量にあるのだと  
いうことはむしろ希望的である。今回のミッシ  
ョンからこぼれ落ちたものが、あるいは潜在的  
に内包されているはずのものが、見えない水脈  
をなして連綿とまたどこかへ続いていくといい。  
To be continued. 手始めに、よんどころなく落と  
した大きな記事のひとつを「分冊」として刊行

することにしたので、次ページを参照されたい。  
左の図版(マイケル・ベンソン『ビヨンド惑  
星探査機が見た宇宙』檜垣嗣子訳、新潮社、二  
〇〇五より。特集トビラも)は、分冊で言及引  
用する予定のもの。(武)

